

昭和二十五年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回）
昭和二十七年四月二十八日運輸省特別取扱承認第三五二號
昭和二十七年十月一日發行

浄土

第十八卷 第十號

十月號

大乘の歩み 眞野正順

私の見る宗教 宮城音彌

十夜スケッチ 吉田宣成

佛前の花 吉田絃二郎

任ずる所多ければ亂を爲す甚し

昔、インドに一人の王様がいて、甜魚を養つていた。骨が少くその肉は非常に美味しいので大いに珍重して、一人の番人を置いて盗まれないようにして、日に八匹づゝ献上させた。ところが、その番人が毎日王様と同じように八匹づゝ魚をぬすんで喰べていたので、魚はへるばつかりであつた。そこで王様は番人の數を八人に増して監視させた。ところが、八人が八人共毎日八匹づゝ魚を盗んでたべたので、忽ちにして池の中の魚はなくなつてしまつた。

李經抄というお經に出て一口ばなしであるが、これは印度の昔に限らない。案外、私共の身近にもこんなようなことが時々みられる。大體、法律の數が多い程、悪いことをする人間の多い證據である。政治も、細くなる程、國は亂れる。舊聞に屬するが先々月ソ聯では、その政體の一番大切な政治局と組織局を廢止したという。何もソ聯をひいきするわけではないが、政治は簡素なのがよい。いくら役人の數をふやしても、各々が魚を盗んだのでは、その害は反つて大きい。

戦争末期の吾國は、法律と統制と兵事とで國民はみんなちつ息していた。敗けるのも當然である。一方では部局を廢しているのに、他方では愚にもつかぬ役をどんどん造つてゐる。インドの昔の一愚王の眞似だけはやめてもらいたいものである。(竹中)

目次

大乘の歩み(4)……………眞野正順(4)

訪問私の見る宗教……………宮城音彌(16)

阿彌陀經の話(4)……………藤井實應(19)

鹿を追う上人……………大崎隆(23)

十夜スケッチ……………吉田宣成(13)

佛教入門(3)……………竹中信常(30)

小説吉水(4)……………東山未知夫(26)

他力の發見……………雲藤義道(9)

佛前の花……………吉田絃二郎(1)

芝園だより

挿畫……………松濤達文



佛 前 の 花

吉 田 絃 二 郎

わたくしはこのごろ、朝毎に佛さまの前に坐るたんびに、今さらのやうに、そこに供へられた花の美しさに見とれることがあります。

今朝は昨日友人が持つてきてくれた花を青磁の壺に入れて佛前に供へました。菊、女郎花、カーネーション等が新鮮な初秋を感じさせます。

このごろの癖で、わたくしはしばらく坐つたまゝ、その花の一つ一つをじつとながめます。何といふすばらしい美そのものでせう！ 何といふ神秘的な生命でせう。その一つ一つの花びらは何かをわたくしにさゝやいてゐます。

レオナルド・ダ・ヴィンチのモナ・リザの微笑にも似

たものを一つ一つの花びらは、わたくしの心に投げてくれます。

わたくしは花の美しさに打たるゝ以上に、神秘に、そして幽玄に打たれます。花といふものを作り、花に生命を賦へて下された絶対の實在について考へなくてはをれなくなります。

わたくしは何も知りません。

しかし朝毎に佛前に供へられた花を見ると幽玄の聲を聴きます。

たゞ一本の花でいい。

佛さまに朝毎に新鮮な花をさゝげよう。

花は佛さまとわたくしとの間にゐて、佛さまの幽玄なお聲を聴かしてくれれます。

お寺に蓮の池があるのはありがたいことです。

蓮のかをりにつゝまれたばかりでもすでにわたくしたちの心は淨められます。

蓮はうら枯れてもなほ人の静寂心をよびさまします。

いつの年であつたか、わたくしは淀の古城の趾をたづねたことがありました。

枯れ草につゝまれた古城の、半ば廢墟に歸した濠の濁り水のなかに、霜枯れた蓮の葉を見出したことがありました。

その數わづか二三十莖の枯れ蓮の裡に、淀城のあはれをこめてゐるやうにさへ感じられるのでした。

太閤の豪奢も淀君の傾國の美も一夢のうちに消えて、ひとり蓮の枯れ葉の蕭條として城門のあたりに、無常を語つてゐるのを、去りがたく感じたことでした。

訪ふ人とてもない山寺の山門をくゞつて、幾畝ともないさゝやかな池に、たゞ一二輪の蓮の花を見出したばかりにも尊く拜まれるものです。

掃き淨められたお寺の庭、そして楚々たる數莖の蓮の花は、大説教にもまさつてわたくしたちの心を打ちます。

お寺にありたいと思ふ花に萩があり。芙蓉があります。

秋の畑にありたいと思ふ花に小菊、桔梗、女郎花、吾木香、河原撫子、百日草があります。コスモス、ダリヤなどの舶來の花もありますが佛さまに供へる花としては、日本の花の方がやさしいやうに思います。

今から三十幾年も前のことです。わたくしは根岸の里に住んでゐました。

今とちがつて静かな路次裏でしたが、せまい庭をへだ

て、隣りには若い佛師が住んでゐました。顔を合はしたこともありませんでした。佛を刻む鑿のりの音だけを聞いて暮らしました。

半年ばかりして佛師は故郷の越後へかへりましたが、今では文展の無鑑査になり、その方面では知らぬ人もないほどです。このほど越後のさるお寺のために十一面觀音さまをお刻みして、一萬人の結縁をお願いすることになったからといふたよりがありました。わたくしはさつそく亡妻を結縁していただくことにしました。

わたくしは夏のころになれば格子窓に紅い寶錢花を置いて佛像を刻んでゐた若い佛師を思い出しながら、佛師の手紙を読みました。

「小生も今は六十歳になり、孫も御座候……」

わたくしは人生の迅速なのを今更のごとく感じましたが、それよりも、もつとつよく心にひびいたものがありました。それは三十餘年前無心に聽いてゐた佛を刻む音が、實はわたくしたちの結縁をうながしてゐたものであつたことに氣付いたのでした。

牧水の二十五回忌がこの九月に行はれた。昭和三年九月十七日、四十四歳の割方短かい生涯を沼津の千本松原の家に逝つたが、牧水は「われ歌をうたへりけふも故わかなしきどもにうち追はれつつ」に始まる處女歌集「海の聲より」「黒松」にいたる十五冊の歌集多數の隨筆と別に牧水全集（改造社）があつて、かの自然主義の巨匠として鵬外漱石以上の聲名をほしいままにした田山花袋でさへ晩年は忘れられた大家であつた事を思ひ合せれば、自然主義全盛期にその作家的盛名を得てよりその間劇しい流行の移り變りに關係なく四半世紀を経た今日廣く一般の口誦にのぼり、あまつさへ戦後専門家の間にも牧水再認識の聲が少なくない。この點、時は正確な判定を下すものである。終戦直後大阪中の島圖書館で一番よく讀まれた文學書の一つとして「牧水物」があげられた事がある。つまり生れ乍らの歌人であつた牧水のかなでる明るく柔らかな調べは人々の心に忘れられた故郷を呼びさます不思議な魅力をもつて居るのではあるまいか。

若山牧水

歌集「路上」の中の『虚無黨の一死刑囚死ぬきはにわれの「別離」を讀みあしときく』の一首が示すごとく、愛好者の層は實に廣い。牧水の名を知らぬ者でも「白鳥は悲しからずや」や「幾山河」や「白玉の齒にしみとほる」の歌だけは知つて居る。わかりよい牧水の歌を支へて居る思惟など取りたてて云うほどのものはないが、彼のリズムのかもしれない一種のベイスンが人を捉へて放さないものである。これは晩年まで一貫して變ることがない。

そして晩年に近い「黒土」「山櫻の歌」あたりになると生活をふくめた自然界の諸相が深くまをもちながら渾然と一つになつてリズムの中に參入して來るのである。ともあれ牧水は日本の生んだ稀有の國民歌人であり、今後その放射する光はよもやうする事はあるまい。(Y・O)



大乘のあゆみ (四)

|| 第四講 ||

眞野 正順

亡くなつた西田幾多郎博士が殊に好きであつた寒山詩の一節に、こう云ふ句があります。

「尋ね究む 限り無き水。源窮つて水窮まらず。」

どんな大きな河でも、だんだん溯つて行くと、やがて次第に狭く細くなつて、しまいには山蔭の岩間から滴り落ちる幽かな泉に辿りついてしまふ。然し、考へて見れば、水のみなもとは其處で窮つたといふ譯ではない。滴たる水の本源は、その背後にある大きな山全體でありまして、山全體の土に含まれた水分であり、やがては、その山に降りそゝがれた天上の雨や露であります。然うとすれば、その水の源は更に目も届かぬほど遠い何處か大海の上に湧きのぼる白雲であり、更にはその大海へと注ぎこむさまゝの大

河であり、小川である、といふ風に果てもなく擴がつて行くのであります。

『源窮つて水窮らず』一つの河と雖も、今現はれている姿が、本當の姿ではない。果てもなく擴がる大きな水の動きの一部分を區切つて、河である、泉である、と名けているに過ぎませぬ。

斯のようなことは、我々の考へには多い事で、我が目前にある一部分だけを掴んで、その大きな眞實の姿を忘れてゐる事が多い。

たゞ、現在の自分の生活に關係深いところだけを、強く感じて、全體の眞實を忘れて、それが却つて苦しんでゐる。源窮して、水窮らず。目前の今は窮つたかの如く見え

ても、眞の運命は決して窮つておらないでしよう。

學者の示す所によりますと、この地球に生命あるものが現はれ出たのは、八億年といふ驚くべき昔でありまして、それが人間としての形をとつて來たのさへすでに六十萬年の昔と推定されております。この事を思へば我が二十世紀の歴史は、廣い大海の片隅のどこかに起つた一うねりの波に過ぎません。然も、現代の科學文明は、その正味から云へば、十五世紀頃から初まつたものでありまして、僅か三四百年しか経つておりませんから、長い人類の歴史から見ればほんの罌粟粒けしつぼの様なものでしょう。

そればかりではない。今ある此の我々の文明が、決して人類の唯一の文化といふ譯ではなく、我々の以前に、すでに、十數箇の文明が、この地球のあちこちに、時を隔て、所を隔てゝ發生し、それ〴〵久しく繁榮して、やがて、跡もなく没落し去つて行つてゐるのであります。然も、注目すべきは、此等の數多い文明は、それ〴〵その時代と事情を異にしつゝも、猶、動かし難い不思議の運命の下に同じ様に繋がれ、それに支配されつゝあるといふ事であります。

(5)
「西歐の没落」といふ著書で有名なシュペングラ―に依り

ますと、こういふ様々な文明の踏んで行つた運命の跡は、すべて同一であつて、我々の現代の文明と云へどもまた、その運命の轍を免れる事は出來ぬ。人類の文明はすべて春夏秋冬、四字の移り變り行くと同じ様なコースを踏むものであつて、それ〴〵その時期を異にするたび、その民族のいだく思想精神もまた社會の姿も自らその性質と形態を變へてゆく。そして何れもみな發生、生長、持續、没落の四つの段階を経て消え去つてゆく。彼はこう云ふ見地で、インド、アラビア、エジプト、シナ等の文化の跡を子細に點檢し、今日西歐文明はまさにその最後の秋の時期から冬への段階にさしかゝり、正に没落の過程に入りつゝありと論斷するのであります。

地上あらゆるものはみなその「運命」を免れません。文化と雖もその例に漏れないでしよう。

人類の文化はほゞ壹千年の長きにわたつて、大きく榮枯盛衰の輪を空中に畫きながら、やがて靜かに消え去つてゆくと云ふ。そしてその後からまた新らしい文化社會が、音もなく靜かに立ち現はれる。思へば不思議なものです。この悠々と果しない人類の歴史に於て、現在我々の世代は何に譬へたらよいか。その一隅に挾さまれた實に小さな一片

に過ぎないのであります。

佛教に依りますと、世界の歴史は、また四つの段階を通じて變化して行くとされております。世界は生れ、暫らくつゞき、やがて減んで空に還る。この世界の成立——成、その持續——住、没落——壞、そして空へと、成と住と壞と空との四つの姿が、車の輪の様にゆつくりと廻つてゆく。廻り終れば、また新らしく同じコースを繰返してゆく。それが宇宙の歴史であります。

こう申しますと、宇宙の歴史は、何時までも、同じ轍を繰返し／＼反覆している、誠に單調きわまりないものゝ様であります。が、實は、この一見單調に見える歴史の繰返しを通じて、更に大きな働を成し遂げているのであります。たとへて云へば、車の車輪のようなものでしよう。車輪は御承知のように、いつも同じ事を單調に繰返し、く／＼廻つておりますが、然し夫れに依つて車の上の物を次第に前へ／＼と押し出しているのであります。その様に、宇宙もまた成住壞空の車の輪を、繰返し繰返し廻しながら、實は更に大きな仕事をしている。それは何であるかと云ふと、宇宙の内にひそむところの尊い性質を内から外へと繰りひろげ現はしてゆく事であります。佛教の術語で

申しますと、『眞如佛性の等流』——つまり佛の本質を繰り擴げ展開して行く事でありまして、云はゞ佛性といふ尊い寶を載せて進んでゆく車輪の動き、それが宇宙人類の歴史なのであります。

宇宙の様々の變化運動は、すべて宇宙の中にある内容を内から外へと自ら繰りひろげてゆく働であると申す事が出来ましよう。この大きな靜かな星空でさへも、實は、今もなを、限りなき空間に向つて盛んに膨脹をつゞけている最中であると、説く科學者もありますが、その意味から云へば、人類の絶えざる努力發明の歴史は、人の内部に秘められた内容を、内から外へと展開してゆく過程と見る事ができましよう。

この社會や文化に於て行はれる様々の推移變化は、大小その姿を異にしつゝ、皆この内なる内容を外へと現はしてゆく齒車の動きであります。然も車輪は軋みなしには廻らない。宇宙の眞實は、たゞ單純にそのまゝ現はれるといふ事はない。何時も惱みを伴ふ。人類のさま／＼の苦難の軋みを通じて宇宙の眞實は靜かに輝き出づるのであります。

こういふ宇宙の大きな歴史の輪は、たゞそれだけがひとつ大きく廻つてゐるのではない。その宇宙の中に含まれる

一切のものは大小とりぐの姿と過程に於て、また四つの運命の輪をおのゝ廻してゐるのです。社會もそうです。個人もそうです。それゝその運命の轍に従つて、生れかつ亡んでゆくのです。夫故、譬へて云へば、世界は、その中に大小さまゝの齒車を數限りなくつめた、大きな精密機械のようなものでしょうか。無限に複雑な姿と内容を湛えつゝ、各その眞實を内から外へと展開し續けているのです。

人間は宇宙の縮圖であります。五十年の短き生命を通じて、宇宙の本質は、やはりこゝに繰ひろげられているばかりではない。實は、その最も價值ある本質が、こゝを通じて輝き出でゝゐる。然も、そのことを自ら自覺して行く事において、萬物中無比なる意味を、人間が擔ふのであります。

歴史の一つ一つをとつて見れば、それゝまとまつた姿をしておりますが、嘗て完成したものとは一つもありません。地上あらゆるものは、すべて未完成であります。これが人間存在のもつ運命でありまして、それ故にこそ、人類は、絶えず、乗越えて進んでゆかねばなりません。こゝに絶えざる人類の進歩の動因があるのです。

然も、歴史の發展は、その最後、完成の曉に來なければ、その理想の姿に接し得られぬといふものではない。理想はかへつて途上において閃めく。途上の艱苦を通して隨處に閃めき出づる。

むしろ、その途上において、隨處において、常に閃いている。

あらゆる個人は、みな佛性の火花を内にもつてゐる。微々たる一個人のつかの間の短き生命の中に、全體の本質は、時に發止として眼を奪ふばかりに閃き出てくる。あの闇をわたる稻妻の輝きのように、突如として人類歴史の中に現はれてくる偉大なる聖者の生涯のごとき、その典型であります。彼の短き苦艱多き生涯を機會として、宇宙の尊貴たる本質は結晶して現はれてくる。それ故にこそ、聖者達は、萬世を通じて渴仰止ことなき「人類の鑑」となるのであります。

越後の良寛和尚の歌に

「淡雪のなかに立ちたる 三千大千世界みっせんせうかい

また そのなかに 淡雪のふる。」

といふのがあります。三千大千世界とは「みつおうち」

と讀みまして、數知れぬ世界、この宇宙を指しております。我々の住むこの宇宙には、數知れぬ世界が満ち／＼ておりますが、それを全體として一つの群と考へれば、この宇宙の外側にもまだ／＼見通すことも出来ぬ廣い空間が擴がつております。夫故、この我々の住む三千大千世界も、たとへば、吹雪のふりしきる野の果てに立つように、その果ては茫として見定める事も出来ません。ところが、この果てしなく大きい三千大千世界の實に／＼小さな片隅、「日本」のそのまた小さな片隅この越後國上の茅庵の前にも、今しも、しきりに淡雪がふつてゐる。粉雪は靡々としてやむことなく、茫として空をたちこめて野の末も見えない。丁度、この宇宙全體の姿と、少しも變らぬすがたにくりかへし現はしている。その様に、いま此處にたゞずむ自分の姿に、そのまゝ宇宙全體の姿が映されているばかりでない。實はその最高の本質と使命とが、嚴として此處に現はれて來ているのだ。この事を忘れてはならぬ。

肅條たる北越の雪の野を前にし、ちつと我身を顧みている老いたる良寛上人の姿が浮んで來ますが、この天地の心を我の内に見出しこれを實現する事によつて天地に參する心こそ、わが東洋の忘れてならぬ尊き遺産の一つであります。

す。

宇宙の悠遠にして莊大なる運行にくらべては、人の一生の存在はかげらふのいのちと云ふもおろかな短いものであります。然しわが生涯のみちかきを知れば知るだけ、思ふことは、この眼前にはかなき生において生くる事ではなくて、仰いで悠久なる天地のもつ意味に於て生きる事ではないか。人間の意味は、この過ぎゆく東の間の存在の外の形に現はれた成否ではなくて、含まれた内なる内容である。大切な事は、内に享けし天地の心をいかに展開し出すかといふことにあります。

世界佛教徒會議が九月に開かれ、世界に大きな話題を投げた。今までは眠つてゐると信じていた——中には日本佛教徒でさへ南方の小乗であると思つていた——のが、俄然、之を轉期として世人の前にデモストレーションをやつたのだから、佛教に無關心であつた人でも、あつと思はせられた。しかも、世界佛教徒といふ人も、あつた。主として東南亞の諸國であつて、日本が今後、大に友好を温め、交流を計ろうといふ程であつて、單なる花火を機に經濟會議すら持たせようとした。裏付けを有し、此會の能なものでない。之は裏面の事で、あるが注目すべきだ。其と今世界が暗礁に乗り上げ、佛敎教理をバツクとした平和主義的の薄く、國々で、しかも、佛敎教理をバツクとした平和主義でいこうとする所、世界は大きな期待を持つてゐる。平和主義を感じられる。恍々たるニュー・ワールドの光明の中に、嚴かに開會されていくのを見ながら、今、改めて世界の前に出たのだという。嚴肅な氣持に打たれた。今、改めて世界の前に出たのだという。佛傳の畫に出てくると同じようなインド僧セイロン僧達も耳目を接して會してゐると、何とも云いえぬ感じであつた。

他力の發見

雲 藤 義 道

一

かけるのであるが、それはどういふことであらうか。いろいろと考へて見なければならぬ問題を含んでいる様に思われる。

ジャーナリズムの世界では、その時代時代の社會通念に適合した言葉で表現することが、記事の内容を解り易く示し、讀者をアツピールすることにもなるが、他力本願の教義が中心生命となつてゐる淨土信仰者にとつては、無關心に過し易い事柄である。新聞編輯者の無理解や不用意を責める前に、まず、淨土教徒自からが、深く反省しなければならぬ問題であると思う。

日本の代表的新聞が、しばしばそのような表現を用いることは、社會一般に「他力本願」といふ言葉の意味が、相當弘く誤解されてゐると見なければならぬ。かゝる一般の誤解については、ジャーナリズムや現下の社會通念にも一斑の責任はあらうが、そのような社

去年の暮であつたか、讀賣新聞紙上に「他力本願は國危し」といふ見出しの記事が一面トップを飾つたことがある。内容は全く宗教に關係のない時局記事であつたと記憶している。何んでも、講和後の獨立日本は、何日迄もアメリカの援助を頼りとせず、自主自立の精神を昂揚すべきことを強調したものであつたので、宗教問題には何らの關係を持つ記事ではなかつた。まして淨土信仰の他力本願の教義について、兎や角の批判を含んでいた譯でもない。おそらく、自主自立の精神を強調する氣持が、他力本願でいかぬという言葉で端的に表現せられたものであらう。

最近でも、大新聞の社説や雑誌の論説にもそのような例を時折見

會通念をつくり上げたことについては、淨土教徒、特に教化指導の立場にある僧侶に大きな責任があると云わねばならぬ。

誤解され易い安易な布教導道に泥んで、他力本願の眞義を説き明すことに怠りはなかつたか。なぜ、かゝる社會一般の誤解を是正する様に努力しないのか。なぜ、現代人の思想傾向や、思考の態度を理解して、それらに納得しうる様に、他力本願の眞義を説こうとしないのか。問題はいろいろに分れるようである。

二

他力本願という言葉が、今日の如く一般の日常語として誤り用いられるようになったのは、そう古い事ではない様に思われる。大正末年に、第一次歐州大戰後の經濟界の不況を切り抜けるため、大阪の經濟人から「自力更生」運動が展開され、全國的に相當な効果を収めたことがある。

もともと、自力とか他力という語は、長い佛教の傳統によつて、わが國民大衆に馴染まれていた言葉だけに、自力更生の標語が一般社會の人々によく受け入れられた譯である。自力更生運動は經濟界の標語としても、又、國民道德の綱領としても、まことに結構な運動であつた。ところが、自力更生が強調せられる余り、それに對する他力依存の意味に、「他力本願」という言葉が誤り用いられる様になつた。これは淨土教にとつては、甚だ迷惑なことであつたが、かゝる外部からの誤解を招くに足るような事情が、淨土信仰者の内に

もあつたことは無視し得ない。

相當な淨土信仰者と目せられる人々の間においても、他力本願の信仰内容に、神秘的且つ呪術的な要素が入り込んではいないだろうか。もろゝの人間的な行業を難行難修として排斥し、あくまで凡夫自力の迷情を否定して、念佛の世界に歸一せしめた結果は、ただ念佛さえ、稱えれば救われるかの如き、誤解を生じた。

これは、念佛信仰に神秘的な意義を認め、口稱の念佛に呪力的な効果をさえ期待する、いわば迷信的他力信仰であつて、近時流行の新興宗教と何ら違ふところはない。そこには人間の我執に對する宗教的反省を通した、佛教の尊い宗教的境地は見出せない。たゞ人間的欲望が宗教の名をかりて、投影されているに過ぎない。淨土教が庶民の佛教として發達して來たために、一文不知の尼入道にも解り易い、簡明平易な教えを説いたことは、當然のことであり、そこに淨土教の大衆佛教としての特色も存する譯であるが、そのために一般の俗信仰、特に我國の民間信仰に多い呪術的且つ神秘的要素との妥協や混合が、結果せられたとするならば、甚だしき佛教の墮落と云わねばなるまい。

三

他力の概念は、曇鸞によつて始めて淨土教義に取入れられたことは、今更述べるまでもないことである。曇鸞は龍樹の難行道、易行道の判別に對して、自力、他力の二道を立てたのであるが、我々が

特に注目せねばならぬことは、曇鸞によつて述べられている、他力の教義は、決して自他對立の相對的な概念ではないことである。

曇鸞によつて示された他力とは、佛力であり、佛の本願力を意味した。他力道の實踐ということも、他力に依存し一切の人間的努力を否定したところに意味があるのではなく、すべての人間の行業は、佛力の發現であると受取られたところに重要な意義がある。人間の自力的な善意や善行も、人間の煩惱自性に徹して見るならば、まことに、惡業につきまとわれた一時的相對的な雜毒の善なのである。完全清淨の善根功德とは佛のみのよくなし給うところである。人間の自性を徹底的に反省して見るならば、人間は佛力に催され、計らわれて行ずる以外に生きる道はないのである。そこに氣付かされたのが他力の發見であり、他力廻向の信心である。

佛教の實踐法たる戒・定・慧の三學修行も、その理想とするところは、我執の迷情を打破して、涅槃の境地を體得するにあるが、人間の力で我執を離れることは不可能であり、離れようとすること自體が迷いであると徹したところに他力道の實踐がある。逆にいうならば、他力の發見せられたところに、佛力に生かされた自己の姿、我執のまゝに無我になりうる境地が開顯されるのである。そこに始めて、人間の自力も全き姿を現わすものと云いうるであらう。

他力の信仰を最も徹底して受取つたのは親鸞である。親鸞の他力本願は、曇鸞の他力義を繼承したものと云われるが、「教行信證」には「他力と云うは如來の本願力なり」(行卷)と示されている。親鸞

は曇鸞の教學を更に進めて、佛力を如來の大慈悲心と受取つた。如來の本願力、即ち大慈悲心にはからわれた世界が、他力本願の世界なのである。

親鸞によつて強調された、「はからいを捨てて」ということは、この身のまゝ、如來の本願にまかせ切ることであるが、その姿そのまゝが、我執を超えた無我の境地である。そこから願力自然の大道が開かれてくる。如來の本願にまかせ切るということが、自己の努力を放棄した無爲安樂な人生を目指す様に考えられ易いが、とんでもない誤解と申さなければならぬ。

他力の救済を仰ぐということが、合理性を求めて止まない近代の人間精神と矛盾する様に考える人もあるが、他力の救済を論理的に見るならば、人生問題の解決の根源を、相對の世界を超えた絶對の世界に求めることであり、人間の知識や力をもつては絶對的な解決は得られないということである。人類の文化や科學は随分進歩したものであるが、果して人類の幸福は増進したであらうか。眞に人生問題の解決が得られたであらうか。人智の發達は一面において新たな人生の苦惱を人類に背負わしめたともいえる。

民主主義だ、共產主義だということも人類社會の幸福と平和を理想としてのことであらうが、その主義、理想の對立に深刻な苦惱を感ずるのが、現代社會の姿である。原子力の發見は科學の發達の最高峯を示すものであるけれども、それによつて滅亡の不安に戦くのも、また人間である。そのような人智の世界に絶對的な救済は求め

得られないのである。

四

現代思想の大きな特徴は、人間中心の考え方である。歴史家の説くところによれば、人間自我の發見によつて、近代史の幕は開かれたと云われる。デカルトの「我思う、故に我在り」という命題も、キリスト教的神の支配を脱し、人間自我の尊嚴を主張せんとしたものである。

人間界の凡ゆる事が、神の支配に屬した時代に、人間の自我が發見せられたことは、當時の人々にとつては大きな喜びであつたと思われる。自我の發見によつて、近代文化の偉大な進歩も跡づけられた。それは人間中心の文化であり、思想であつた。然るに今や、近代文化の危機が叫ばれ、人類の平和と幸福が更めて反省せられなければならないとなつてゐるのは何故であらうか。

人間中心の思想、自我の主張には、人間性に對する深き反省が伴なわなければならない。人間の自我は、それ自體、自愛、我執の迷情となり易い本性をもつてゐる。それを佛教では煩惱と教えてゐるのである。

釋尊の説かれた無我も、さとりも、歸するところは、我執の迷情を打破するにあつた。それが、後に大乘佛教の思想や信仰として展開せられた譯であるが、佛教教理の組織發達に伴い、そのさとり境地について、空とか無とか絶對とかの佛教哲學が完成することに

なつた。佛教哲學は東洋的思惟の深遠な思想體系を組織したが、それは所詮、佛の智慧についての理論に墮して行つた。さとりだ、空だ、無だという概念や理論の世界を超えて、佛智不思議と受取り、如來の大慈悲心の中に生きる世界が、他力本願の境地である。

他力本願の眞義は、決して無爲自然の意味と間違われてはならない。佛智のまゝに、我執を止揚した、何物にも碍げられることなき自由無碍の人生が、他力本願の生活である。無爲安樂の消極的な人生ではなく、彼岸の光りに護り導かれる創造進化して止まざる人生生活なのである。「念佛者無碍一道也」と云われるのも、正にその風光を示したものである。

他力本願で國が危いどころか、現代文化の危機を救い、苦惱と不安に満ちた現代人にゆるぎなき人生の力を與える源泉である。

淨土教における「他力の發見」こそ、現實の悩みを救い、人生に生き抜く力を與えるものと云わねばならない。

○鳩は平和のシムボルとして、豫備隊が軍隊でない證據として徽章にさへなつてゐる。もつとも、そのうち鴛にかわるといふ話もあるが？ この鳩は、他の鳥が水を呑む時は首を後へまげねばならないのに對し、水を吸上げる唯一の鳥だ。○蛇は耳がなく、舌を音波に同調させて耳にする。○鳥は味覺も嗅覺もない。○中國ではキリストの生れる二千年の昔から十字架は神聖なものとなつてゐた。もつとも現在は質屋の看板である。

十夜スケッチ

鎌倉光明寺



吉田宣成

お十夜のかもし出す格別の風情とゆうものは、やはりその名が示す通り参詣人の多い宵

のひと時であらう。しみ透るやうな夜氣につゝまれた淡い光量のなかに、古刹の大伽藍と老松が大きく浮上つて見え、様々な騒音が得體の知れない匂ひの流れと融合つて、渦のやうにどよめいてゐる。吐く息の白い宵を難踏にもまれながら、十夜に最もゆかりの深い

鎌倉光明寺に詣つてみよう。

夜店

地方色のゆたかなことが昔からお十夜の特色とされて來てゐるが、此所でも参詣者の大半が近郷近在から集つて來る人々、殊に漁師お百姓の中、老年の者によつて占められてゐる。従つて裸電球やアセチリンガスのチカチカ燃える夜店の燈火の下にも、やはりその鄙

びた参詣者にふさわしい品々が並べられてゐる。むろん都會風の流行品を派手やかに賣る店もあるが、十年一日の如く在郷相手の老舗(?)が幅をきかせてゐる點に、お十夜の露店風景の面白味がある。農具・大工道具を賣る店、木鉢・重箱を賣る店、股引・腹掛・地下足袋を賣る店、種苗・球根を賣る店など、大體毎年の顔ぶれで、夜店ながら相應の店構えをしてゐる。それらに混つて日用品・小間物化粧品のお店、天狗の面に赤鬼青鬼の面が目立つ玩具屋、ブツキリ飴屋、店先きで湯氣をあげてゐる饅頭屋、それも巾着の紐をゆるめながら、悠長に買物をあれこれ思案する人々が、氣樂にひやかせる値段のものが多し。むろんこおゆう場所には、鉢巻をした眼つきの悪いのが地べたを叩きながら「そらどうだッもつて行かねえか!」と罵聲をあびせて、人の好い在郷者をたぶらかす悪質テキ屋もまかり出て來る。

總門を入ると、山門までの敷石の兩側には大小四つほどの見世物がかゝつてゐる。銅羅や大鼓に合せて、ブラスバンドが艶歌詞のうらぶれたメロディーを吹奏してゐる。また吹奏の合間には、古くさい忘れられてゐたやうな流行歌のレコードをひつ切りなしにかけて

あるが、夫々の見世物が勝手氣まゝにこの音響宣傳をやらかすので、このあたりは全く阿鼻叫喚に近い。さうした狂亂の鳴物を背にしでは、夫々の小屋の前で片手にマイクを握つた中年の男や小肥りの年増が、例の氣味の悪いほどに腹がれた聲で「親の因果子に報ひ」式の説明を披露してゐる。併し半ば啞然としてそれに聴き入つてゐる在郷者の表情は眞鍮に近い。云ふ迄もなく見世物の内容は、犬・猿芝居、蛇娘に龜娘、氣の利いたところで曲藝サーカスと云ふところである。

山門の右側は松の木が多いが、この邊には毎年、おでんや、壽司屋、蕎麥屋が急造の小屋がけ飲食店を並べてゐる。地べたに筵を敷き、その上に赤い毛氈をのべ、ちやぶ臺を三つ四つ置いて、店先きでにぎやかに料理する。在郷のお客さんの休息所にはこれでも充分で、かゝんだ背中に斜かひに包みをくゝりつけた老人連が、べたりと赤毛氈の上に坐りこんで、齒のぬけた口で喫つたり食べたりしてゐるのがみられる。

山門を入ると兩側に老若の乞食がうごめいてゐるが、彼等は諸所の緣日や祭禮の日程をよく辨えてゐると云われ、毎年殆んど馴染みの顔ぶれが集つて來てゐる。彼等が身振りよ

ろしく哀れに物乞ひしてゐるすぐ頭上では、此所の十夜で有名な双盤が念佛に合せながら、古めかしい音律をかき鳴らしてゐる。山門の一隅に幕を張りめぐらした急拵えの舞臺を設け、大鼓と共に三張りの双盤が強弱緩急、まことに原始的な單調さを繰りかえしてゐる。毎年こゝで双盤を張る老人連は、やはり近郷のお百姓で、そのグループを「鉦講」と呼び、大鼓で行はれる十夜法要には重要な位置を占め、後述のやうに引聲念佛を務める。

山門から大殿の兩側にもやはり夜店が並ぶが、こゝでは廻りに客を呼び集めて「さてお立合ひ」式のテキ屋が、まことしやかに賣品の効能を説きまわつてゐる風景もみられる。

十夜には大殿からやゝ手前の敷石に、尺角の角塔婆が建てられてゐるが、この塔頭からは白布で綱つた綱が堂内へ導かれ、さらに外陣内陣を経て、堂奥正面に安置されてゐる御本尊阿彌陀如來の御手にまでとゞいてゐる。

いはゆるこれは「善の綱」であるが、現在でも「善の綱講」と云う講中があつて、年々十夜には新しい善の綱を奉納する定めが行われ

てゐる。さて大殿の大きな賽銭箱を廻つて、段々を

登ると、その邊はおびただしい參詣者が聳しめいてゐる。賽銭を投げる人々、献燈献香をする人々、大殿のきざしはしが揺れ動くほどの混雜ぶりである。

参 籠

もう／＼たる溫氣の立ちこめる二百數十疊敷の外陣にうづくまる老人群の洪水、特に老婆さんの多いことに一驚する。みなお籠りをする人達だが、ぼろのやうに蹲つてゐる者、海老のやうに寝ころんでゐる者、或ひは足の踏み場もないその中をよろ／＼立上つて躓いて行く者、ふと桑の葉の上にうごめく蠶の群を想ひ出す。併しお籠りと云つても、唯堂内に一夜をぼんやりすることなしに明かす譯では勿論なく、何々流御詠歌講中とゆうグループがあつて、法要・説教以外の空いた時間には、御自慢の連中が集つて「ありがたい」詠歌コーラスを始めるのである。併しそれも深更に及ぶと、いよ／＼歡喜勇躍御詠歌に踊りが伴ひ、それがさらに高調してくると赤や黄の襪をかけた威勢のいゝ婆さんなどがしやしやり出て、聲自慢の歌ひ手の俚謠・流行歌に合せて四ッ竹の拍子宜しく、殆んど亂舞に近い踊りに移つて行く。かうして秋の夜を徹して踊り手、歌ひ手、見物人が堂内にさんざめ

く譚で、大殿・開山堂はまことに老人達の無上の樂園となつてゆくのである。踊り疲れ歌ひ疲れると、そこは心得たもので堂内には白の上張りを着こんだ三四人の按摩さんがゐて、上下格安で凝りをもみほごして呉れることになつてゐる。

初夜法要

梵鐘が供出されない以前には、法要に先立つて一番鐘がつき鳴らされた。この寺の大鐘はやゝ重い音色ではあつたが、それだけに夜陰にこもつて莊嚴な餘韻をたゞよわせた。併し今では宵の八時に大殿に雲板と並置されてある直徑四尺に近い大太鼓が鉦講の老翁によつてうたれる。堂内を振動させるやうな鼓音は、境内にも流れ出て其所此所をひやかしてゐる參詣の人達を呼び集める。

やがてこの合圖によつて書院に憩ふ隨喜寺院は、夫々にあでやかな法服を身にまとい、一名「からす」と呼ばれてゐる黒い水冠を被つて席次に順つて待期する。間もなく貫主が役者二名、伴僧二名を従えて、居室より書院へ現われる。この時既に、大殿からは「百八燈講」の重立つた老人二三名が、各々柄のついた雪洞をとつて入堂の先進者として控えてゐる。また十種供養をする稚兒二十名は、朱

色の袴、白い直垂、寶冠をいたゞいて開山堂裏廊下に衆僧の行列に加わる爲、寶冠の瓔珞を鳴らしながら居並んでゐる。

ほどなく大殿裏堂から半鐘のけたゞましい音が傳わつて来る。書院の衆僧は貫主を中において一列を作り、そこから開山堂へつゞく渡廊下を靜かに進んで来る。稚兒はそこから先進の衆僧と貫主の間に織りこまれる。ほの暗い開山堂の濡椽から大殿へ及ぶ渡廊下には幾つかの春日燈籠が點燈されてゐるが、その鈍い光が淀んだ蓮池におちて、かすかに揺れ動いてゐる。行列はたゞ黙々とゆるい足どりでこゝを渡り、大殿の裏手から堂内へと入つてゆく。

さて内陣は煌々たる照明が施されてあつて朱塗の須彌壇、金箔の天蓋を始め、數々の莊嚴具・供物がきらめいてゐる。須彌壇上の奥深く半眼微笑の御本尊も、ほんのりと金色を映してゐる。

導師(貫主)、衆僧が夫々の坐につくと惟那(發唱者)によつて四奉請が誦し始められる。この偈の間に、稚兒の十種供養が行われるが、須彌壇の兩側よりわずかの間をおいて稚兒が朱塗の三寶に花をそえた供物をのせて、導師の登高座にすゝむ。導師によつてこ

の供養の品々に灑水が行われると、それを須彌壇の前へお供えするのである。十種供養が終ると、甲念佛、阿彌陀經へとすゝみ、この經と共に香盤行道が行われる。柄香爐をかゝげた惟那が先頭に立つて衆僧をこの折込式の行道へ導いてゆく。

やがて阿彌陀經は終るが、行道はそのまゝのテンポで、引聲念佛へと移つてゆく。この念佛は極めて調子の高い御詠歌風の節廻しで、始めは比較的ゆるいリズムで詠唱されてゐるが、中途から鉦講に引移されてゆくあたりからは、さながら歡喜勇躍を表わすものゝ如く、急調子に變り消ゆる如く見えては又高まり來つて、終ることを惜しむかのやうである。これは雲板と大太鼓を力一杯張り乍らの詠唱であつて、いわゆる地方色の濃厚な點が目立つてゐる。引聲念佛の終了と共に初夜法要も凡ての儀式を終え、しずかに導師・衆僧・稚兒の行列は退堂してゆく。

この後引つゞいてお説教・お施餓鬼會が行はれるが、すでに法要の済んだ大殿のそここゝで、老人達の至極のんびりした御詠歌が唱え始められてゐる。

名士訪問

私の見る宗教



宮城音彌

一寸途切れた月例訪問は、讀者諸氏の輿論に應えて、今月は社會心理學者宮城氏への訪問となる。NHK高瀬氏の好意にて、同第一スタジオ内で宮城氏に喰下つて一問一答、一答一問を重ねた。氏は放送で相當おなじみの方が多く、長く歐米に學び、ブロンデルの門で特に社會心理、異常心理の方を専門とされる。かゝる氏に宗教の問題をぶつけるのは、いささか當を得てないかもしれないが、それだけに、思切つて割切つた話もあり、諸氏の御評讀を待とう。東京工大教授

新興宗教とて、んかん

「早速ですが、戦後雨後のたけのこのように出ました新興宗教へ澤山の人々が走つてゆく心理は、どう説明なさいますか」

「私はね。戦前、戦時中を通じて、日本はいわば漠然とした一つの天皇信仰とでも名づけうべき宗教を持っていた。其が、終戦と同時に威力を失つて、人々が精神の據所を無くして空虚な状態になつて、どつとばかり、反

動的に新興宗教へ、もたれかゝつた——と、こう思います。いずれにせよ、キリスト教程發達しておりませんで、假に宗教心理としても宗教妄想に屈するものですね。私共の學問の中では、んかん等の場合と同じで、氣が立つていて、理性もへちまもないプリミイティブ（原始的）な宗教です。前者の代用品として後者が選ばれたと見てもいいのじやないでしょうか」

こういう説明を聞くと聞いている方で、一寸訊ねてみたくなる。

「なるほどそれも考えられましようが、少くとも日本人という民族は不思議な民族で、めい／＼の宗教を持ちながら、又、一方に國民感情として、天皇崇拜、乃至今でも、天皇に對する敬意を併立させている民族ではないでしょうか。天皇とか、皇祖に對して、宗教上の同じ歸依の敬禮を行つたとしても、あくまで、國民としてのセレモニー（儀式）にすぎなかつたのじやありませんか。たとえば、盛に強要された皇居遙拜にしましても、國民としての作法で、聖なる天、淨土を祈念する

のとは大凡異つた心理ですから、天皇宗教とも名づけるものが、國民一般にあつたか、どうかは疑問だと思ふのですが」

「いや、たとえば、今、貴方がセレモニーだと言われたが、佛教のお盆の行事なんかはセレモニーじゃないですかね。あの時は天皇は絶対でしたね。やはり一つの天皇宗教とでもいふべき原始宗教じみたものがあつて、あゝした生命をさへ捧げると云ふ風に出て來た。それがノックアウトされて新興宗教へ行つたと云う事だと思ふのです。勿論、之は日本にだけしか用いられないもので、佛教は、之と異り人類的な宗教であり、「開かれた」性質を有しており、右のようなものは大へんちがうものです」

何が新興宗教へ行かしたかは、色々と問題があるようである。氏は物腰柔らかに、次の質問を待つておられる。

迷信と正信

「では、迷信と正信の區別は、どうなりましようか」

「そりや、性質が根本的に違ふというのでなしに、信じ方の程度の差ですね。

信仰は迷信と俗信と正信とに分けますが、まず、迷信は幼少の時の着物みたいなものです。だん／＼人間が育つて行くと、其では間に合わなくなつて俗信の着物を當てがう。更に進化して、完全にびつたり身に合うものが正信です。幼時には迷信でもいいのです。それ／＼の人に應じた着物のようで、めい／＼にあつていて、おかしくなければよいでしょう」

「迷信、正信の區別には、誰にでも一應は話してわかる合理性とか、普遍性だとかいう事は考えられませんか」

「それは宗教の成立そのものを説明するとおわかりかと思いますが、宗教というものは大體普遍的な人類的であるべきはずのもので、未開社會の環境には大別して、自然的なもの、社會的な面と考えられます。自然的な環境に對しては人は技術的心理を有しておりまして、寒さに對しては、どうしたら防げ、天災に對しては、どうあつたらよい、自然

現象の中にくりかえされる秩序は如何等々、理論的に思索して、そこに原理を發見し、普遍的な眞理を見出していく面がありますね。これが段々と發達して科學の世界となるわけです。

それから社會的な面では、各人、各集團をばら／＼にしないように自ら協同していこうという社會性大衆性が出てまいります。トミズムなども一つの表われで、之を部族の中心信仰として血族的、民族的な心理を作つて來ます。そこから自ら同胞愛とか、民族宗教、民族意識、はては、しだいに高まつて人類愛にも到る要素を持つていゝのですね。

この兩方が別々にあるのではなく、互に影響し合つて社會心理が深まつていくことになるんです。ですから、宗教も、どれを叩いても普遍性を除いては成立たない。ですから普遍性ということ、余り正信、迷信の區別には重きをおく點ではないのじゃないですか」

「では、現在の社會不安に對して、宗教はどういう價值を持つていゝとお考ですか」

「今の佛教では、意味がないですね。一種

の未開宗教と極言してもいいですよ。非合理性と混然雜居しているようではね——」

「それでは一寸申上げたいと思いますが、

佛教等は、そも／＼高遠な教理を持つて今日まで、やつて來たのですが、それだけでは一般大衆我々が、ついて行けない。佛教を大別して、理論的方面では禪、大衆的社會的方面では淨土教というふうに考えられ、後者は、高遠な理想を、凡夫——つまり先生の言われた非合理性と雜居するような人間そのもの——に適わしいようにして説かれております。むしろ、其等人間こそ淨土の門に入るものとして今日一番多くの信者を持つてゐるんです。つまり、人間は年が進むにつれ、原子爆弾を作つたりする頭腦の進化がある反面、いつまでも原始状態にある人間性を血肉と共に持つてゐる。それを基盤として人間宗教があるとしたら、宗教の本質は、不變であると考えねばならぬではないでしょうか」

「そうですね。しかし、今までがそうだからといって、將來を決めることではないですよ。」

例えていうと、今マティアリヤルズ(素材)が粘土だから、將來もそうだということはないくて、瓦になつたり皿になつたりするのですからね」

しかし、人間にはいつまでも粘土であるべき何物かもあり、それが又、人間をして人間たらしめているものが多いように思うのは記者の偏見ばかりでもあるまいが、さて、次に移る。

將來の宗教

「將來の宗教というお話でしたが、具體的に云つて、どうでしょうか」

「アインシュタインは佛教などにふれて、

宇宙の調和ということを云つております。全

宇宙の宗教化とでも云いますか。又、デュー

イは、歴史的宗教と宗教的なるものと二つに分けて、前者は、傳統宗教、教職者、バイブル、聖典などであり、後者は、理想心、向上

心等をいれまして、之こそ、舊來の宗教の數に拘泥しない自由な宗教そのものの進みであるとしておりますが、この兩者の考えなど

は、宗教のあるべき姿を指示するといつてよいでしょう。とにかく、ただの自己安心だけでは問題になりませんね」

氏は現代の宗教は未開のものと断定したが、將來に關しては、尙多く佛教の含む、しかも現在の佛教に表われていない眞理の方向に、望みを持つように、此の言は受取れるようだ。氏も佛教を探れば尙多くの面白い材料を見出されるだろう。聖道門、淨土門の事を話出したら、初めて聞くが、面白い分け方だと云われていた。

吉田絃二郎さんも、氏と同じ香掛の星野旅館の別荘だそうだ。そういえば、先號の中西悟堂さんも豫定していた弘田龍太郎さんも一緒で、偶然に何か糸を引いてゐるみたいだ。(R・M)

維持會員芳名(敬稱略)

石上博應(小樽)
岡田乾也(大阪)
田代好雄(佐賀)
誌上厚く御禮申し上げます。



阿彌陀經の話

藤井實應

「舍利弗、かの土を何が故ぞ名づけて極樂とする、其土の衆生もろもろの苦あることなく、たゞ諸の樂のみを受く、故に極樂と名づく。」

お釋迦さまが、舍利弗はじめ多くのお弟子方に對して説法なされました「舍利弗よ、ここより西の方はあるかに極樂という淨土がある。そこに阿彌陀という佛がいらせられ、まのあたり法を説いておられる」とお説きになり、つゞいて、この文の如く「舍利弗よ、か

の淨土を何故極樂と名づけるかという、その國の人々は苦しみと
いうことを知らず、たゞ樂のみを受けるから極樂と名づけるのであ
る」と仰せになりました。前にも申しましたようにお釋迦さまの御
説法をすなおに受けとれたらよいのであります。阿彌陀佛のお淨土
は苦しいということがなく、その國の人々は樂しみのみを受けるか
ら極樂という名がついているのである、極樂は、ほんとうに楽しい
世界であると信ぜられたらそれでよいのであります。

極樂とは反對に、この世の中には苦しいことが充ち満ちておりま
す。第一に思い出されるのは病氣の苦であります、現在私の周圍に
たくさんの方がこれに苦しんでおられる、病氣の苦は説明を要しな
いほど、殆ど誰しも若干の経験はあるであります。「病氣と貧と
戀」と昔からいわれているように病氣に次で苦しいのは貧でありま
す、否、病氣の苦もこの貧と深い關係をもつており、病氣の苦も貧
の苦が無ければ半は苦から脱れ出ることが出来るほどであります。
貧ほどつらいことはないと言いますが、現代は日本の
大多數の人がこれを経験しているといつてよいではないでしょう
か、「田あればあるで憂い、田なければ無いで憂う」とお經にあり
ますが、田を金という字にかえると現代人には一層はつきり致しま
しょう。いかに金のお金のことが氣にかゝり心を悩ましていることとし
よう。一にも金、二にも金、三にも金というではありませんか。金

に餘りにもとらえられているのが現代社會の病だといつてもよいと思います。こういう社會ですからお金が無くなると、どうして食べ、てゆけるかと心配になるのも無理ありません、それは實際に當面したものは實に深刻な苦しみであります。金の無い苦しみはよく分るが、それでは有れば金の苦しみは解決するかというと、有れば有るで苦しむ、現にあり餘る金をもちながら苦しんでいる人も少くないのであります。無ければ無いで苦しみ有れば有るで苦しんでいる、これも現代人の多くのすがたであります。お金に關聯して現代の人を苦しめるものに失業ということがあります、失業苦という熟字もよく使われるほどです。失業は直ちに生活をおびやかすからであります。まことに失業ということは失業した者にしか分らぬほど深刻な苦であります。幸に仕事に就くことができたとしても、その仕事を面白く愉快にやることが出来ぬという仕事の苦があらわれたりする。毎日やつている仕事面白くないということの苦しみは、これまた説明を要しないでありましょう。次に戀は苦しみどころか楽しいものだともいえましょうが、それだけに失戀の苦は本人にとつて致命的な傷手ともなるのであります。たとい戀を得たとしても、「いつまでもいつまでも變らぬように」と誓うだけに、はかないものなのであります。そして戀とか愛とかいうものは、その裏に虚偽、矛盾が藏されています。人々をむすびつけると同時に深刻な敵對關係にさえ追いやるものであります。「人間は愛しそして死ぬと

いうだけでは不充分で、人間は憂し、罪を犯し、そして死ぬとかう言わねばならぬ」と或人は申しました。戀は楽しいといわれる反面にはこうした性格のあることによつて苦のともなうことを知らねばなりません。病氣と貧乏と戀とは若い時代に早く卒業するがよいといわれますが、なか／＼若い頃に卒業どころか、終生つきまとうて苦しめられるものであります。まだそのほかに、いつも悩みとなり苦しみの種ともなるは人と人との間柄のことでもあります。人は一人では生活ができません。人々との共同生活の中に生きてゆくことができるのであります。ですから人と人とうちとけあうてなかよく暮すことができれば、人は一番しあわせであります。私たちは仲よく暮したいのであります。しかるにそれがなか／＼にうまくゆかず、親しくせねばならぬ間柄に一層ごたごたが起り易いのであります。なかよくしたいと願いつゝけんかをする、それは苦しいことです。それを廣く大きな立場からいうと、平和を願いつゝも戦争をする人間ということになります。人と人とうちとけあうほどの楽しみはないのであります。此の世の中には餘りにも争いが多いのであります。そうして人間は苦しむのであります。そのほか愛するものと別れねばならぬ苦、憎いもの怨あるものと會わねばならぬ苦、老いゆく苦、死なねばならぬ苦など苦から四苦八苦の世の中と申しているごとく、まことにこの世にはそうした心配ごと、悲しいこと、惱ましいこと等々の苦しみがみちみちております。こうした苦しみを體

驗しているものには「もろもろの苦あることなく、たゞ諸の樂のみを受く、故に極樂と名づく」と釋尊の説きたもう極樂を聞けば、その世界が慕はしくもあり、その世界に生きたいものと願わずにはおれません。

こゝで一往反省しておきたいことは、極樂は極めて楽しい世界、樂な世界であるのですが、その樂というのは、この世間でいう苦に對する樂ではないということです。前にも申しましたように、金の無いのは苦と申しましたが、それでは金が有れば樂かといえ、貧乏していたものが急に金がたくさん入ればそれは楽しいこと、樂なことだといえるでせうが、その金が急に入つた爲に家にごた／＼が起きたりする、金ある爲に苦しむということにもなるので、有るのが必ずしも樂とはいえないのであります。金にとらわれてゐるものには有無悉く苦であります。それと同じように失敗したり、損したり、悪口いわれたりするのは苦であります、それに對して成功した、儲けた、ほめられたというのは一往「樂」といえましょうが、それは相對的にいわれる樂で、前の失敗、損、悪口と離れぬ樂ですから、その裏に苦がふくまれていて眞の樂とはいえません。成敗得喪、毀譽稱譏などそれにとらわれているものはみな悉く苦なのであります。大體、苦ということは本であります。無明とか惑とかいうのは、この天地のほんとうのすがたがわからぬの

を申します。天地一切は依りつ依られつ、助けつ助けられつ、限りのない縁によつて出來ているのであります。それにもかゝわらず、我ありと考へ、我がものであると執着する、そうした無明、惑をもとにして行動するからそこに苦しみが生ずるのであるというのが佛教の考へであります。ですからこの考へという世間でいう樂も實は無明をもとにしてゐる以上苦であるといわねばなりません。要するに極樂の樂は世間でいう苦に對する樂でなく、苦樂を超えた眞の樂、無明を打ち破つた覺りの境地にあらわれる樂なのであります。それを「極樂」という言葉であらわしてゐるのは淨土の性格を最も象徴的に語つてゐるものといえます。善導大師は「極樂は無爲涅槃界なり」(『法事讃』)と申されました。無爲涅槃界というのは自然のさとの境地を申します。おさとの境地ですから、苦樂にとられず、苦樂を超えて、苦樂を生かしてゆく眞極の世界であります。それが極樂であります。

「たゞ諸の樂のみを受く」と仰せられたお言葉をもう少し味わせていただきます。私たち人生に生きゆく時、いろいろのことがらにでています。私の周圍にはたくさんの人がゐるし、かぎらない事物があります、私はそれらにかこまれてその中に生きてゆくのであります。いろ／＼のことにであうとき、それを如何に受けてゆくかということが私たちの生きゆく上に大切なことがあります。受くべきことは正しくすなほに受けてゆかねばなりません。受くべ

きものを避け逃れようとするやと却つてそこに苦しみが生れるものです。たとえ苦しいことでも、受くべきものは受けてゆくぞと覺悟ができるとその苦しさも半減する。いやその苦しみであることさえ忘れ去つて、その中に楽しみさえ見出すことができ参ります。無論受けとると申しても拒絶せねばならぬ場合もありますが、拒絶すべきものを拒絶することは、それも一つの正しい受けとり方の一つです。受取るべきものを受けてゆく(受取)。しかもそれは出来るだけ正しく受けてゆく(正受)。さらにそれを「ありがたく」受けとつてゆく(拜受)。かように、受とるのにも、より正しく、より正しくと受けるように心がけると、遂には有がたく受けてゆけるようになるのであるであります。

私の親しい信仰の友——よく念佛申される友に、どんな事件、どんな物についても、有難い有難いと、善きに良きにと受けとられる方があります。或る大都市に商賣をしておられたが、戦時中その商賣も統制をうけてやめることになり、疎開して慣れない農業に従事しておられました。疎開ができて有りがたい、農業ができて有難いと感謝しておられました。只今は焼跡へもどつてきて、もとの商賣に従事しておられますが、もとのところへ戻る事ができ多年慣れた商賣が出来るようになったて有難いと自己の商賣に懸命につとめておられます。疎開先のお家へ二三度盗人が入つたそうですが、お見舞すると「ありがたいことには何のけがもせず、たいしたものも取られずにすみしました、これも御本尊さまのおかげです」と盗人に入られて却つてそこに「有難さ」を見出されているのであります。

最近急性神經痛を病まれて暫く静養せられました。「おかげで今度の病氣で他の商店へ商業見習に行つていた息子が家の商賣をやつてくれることになり、すべてがととのえられてきました。今度の病氣も十三年ぶりでしたが、またこうして如來さまのお育てを頂きました」と病氣も如來のお育てと感謝をしてをられました。この念佛の友にとつては順逆ことごとく、よきに導きたもう如來のお育てと受けとられるのであります。私は事物の受とり方の御手本をその方に學ぶのであります。前に一言したように受取り方と申しても只消極的に周囲の事情に随つていただけをいうのではありません。積極に爲すべきことを爲してゆくのも一つの正しき受けとり方でありまして、この友も商賣の上にもその他團體のお世話などなか／＼に積極的にやつておられるのであります。

順逆共に如來のお育てと受けとつてゆかれる友は、前から熱心に法を求め、眞實に念佛を申され如來のお育てを蒙つた方でありま。念佛申して如來のお光明の中に攝めとられ、お育てをうけるとき世間でいう苦しみさえ苦しみとはならず、それをお育てと感謝して受けとることが出来る、そこに眞實を見出すまでになり、遂には、「たゞ諸の樂のみをうく」との極樂の世界の一分をハッキリと身近に味うことができるようになるのであります。阿彌陀佛の世界は、「たゞ諸の樂のみをうく」る世界、即ち完全な極樂の世界であります。その世界の様相は、釋尊が次々にお説きになる御説法によつて一層明らかになるのであります。(つゞく)

鹿を追う上人



大 崎 隆

梅尾の明恵上人はすぐれた名僧として、時
の人々の崇敬を集めていた。人里離れた山ぶ
ところ庵を結んで、自ら研學修行すると共
に、弟子の指導に力を盡していた。

閑寂の境域には、秋が深まり、木の實が豊
かに枝に垂れるようになった。附近に多く棲
む鹿は、上人の徳に慕うが如く、庵の四圍に
群れ集つて、庭前にまで近づいて來ることが

あつた。上人は洋机を前に、讀書に疲れた目
を窓外にむけ、そこに慕いより、木の實など
をあさる鹿の姿に、思わず微笑をもらしたり
時には手づからそこばくの餌を投げ與え、親
鹿の陰にまつわる子鹿の可愛らしさに目を細
めたりして、閑時をすごすのが日常であつ
た。

鹿もだんだん馴れて、今では上人の手もと

にまで來て、黒いつぶらの瞳をあげて、上人
の温顔を眺め先るまでになつた。既に、庵の
まわりは鹿共の快い遊び場となつて、上人以
外の人々にも段々馴れて來た。

或る日、上人は、これ等の鹿の樂し氣に、
伸々と庭先を徘徊する姿をちつと眺め入つて
いたが、ふと心づくくと、今まで慈眼を以つて
見入つていた上人の瞳には、何か鋭く光るも
のが現われて來た。と同時に、今まで机に凭
つて靜坐していた體を、つと起こすと、ツカ
ツカと縁先まで運ぶとみるや、大聲を放つて
鹿を追つた。安心し切つて遊んでいた鹿は、
日頃優しい上人の、この叱聲に、一瞬は呆然
としたが、次の瞬間、動物特有の本能に目覺
めるや、砂を蹴立て、落葉を卷いて、忽ちの
うちに悉くその姿を木立の中に消してしまつ
た。遠くで此様子を見ていた弟子達も、始め
はちよつと驚いたが、「きつと鹿が何かいたづ
らでもしたので、上人が叱つたのだらう」と
思つてみたが、然し、少し深く考えてみると
又一つの疑問が湧いて來た。

「だが、それは我々凡下のなす業だ。上人

のように、學德兼備の高僧にして、どうして鹿のしたいたづら位いで、あのような大聲を發せられるわけもあるまいに」

そう思つてはみたものの、その日はそのままにすぎたしまい、翌日の朝になると、弟子達は、昨日のこともいつか忘れて、それぞれの業務にはげんでいた。弟子達が忘れたと同じように、鹿達も、昨日叱られたことも忘れて、既に毎日の習慣になつていたので、群をなして、またノコノコと上人の庵の庭に遊びにやつて來た。

ところが、今朝は、先頭の一匹が庭に足を入れたか入れぬ瞬間、またも上人の叱事が、雷の如くに下つて來た。鹿共は一目散に逃げ散つて行た。

上人の居間の邊りで響いたこの大聲に、忘れていた昨日のこと、そして今朝の出來事に新たな疑念を胸に抱いた弟子達は、それぞれの部屋から飛び出して、上人の所へ集つて來た。

寂然不動。たつた今、大聲を發した人とは思えぬ静けさに包まれて、上人はいつものよ

うに、窓邊の机に向つて讀書に余念がない。埃一つ動いたけしきも見えぬ、そのたゞずまいに、弟子達は再びびつくりして敷居ぎわに群れ坐つて、呆然と上人を仰ぎみた。

この氣配を察してか、上人はおもむろに雪白の眉毛の下に輝く、叡智のまなこを弟子達の上に投げた。弟子の一人が口を切つた。

「御師匠様。おたづねの儀がございます」

「何ごとぢやな」

その聲は山間の湖の中から湧き上がった如くに、静かで、奥深い響きを持つていた。

「實は、昨日もそうでしたが、何故、日頃あのように可愛がつておいでになつていた鹿どもを、今朝もまた、大聲を以つてお叱りになつたのございますか。」

他の弟子がついでいつた。

「何か、わるさでもしたのでお叱りになつたのでしょうか」

「いや」

「では、御讀書の御邪魔でもしたのです

か」

「いや」

上人はいづれにも軽く首をふつた。そしてけげんな面持をして、その答を待つてゐる弟子たちをぢつとみて、いつた。

「鹿は可愛いものぢやよ。毎日々々わしの勉學のつれづれに、此上もない楽しみをもたらししてくれた。若い鹿、老いた鹿、幼い鹿、牡鹿、牝鹿、色々の鹿が、それぞれのありのままの姿をみせてくれる。親子の情愛、夫婦の睦じさ、仲間同士の情誼。どうしてどうして人間などでも鹿に及ばぬ者の多いのを、わしは教えられた。段々馴れて來れば、可愛いさも一しおまして來る。人に馴れ、所に馴れて此頃ではもう、ここも自分等の棲家も變りないくらいに、のびのびと遊ぶようになった。それを見ているうちに、わしの心にふと一つのが閃めいたのだよ」

上人は、その奥深い眼を庭先に移して、颯々と鳴る山風に、樹々の大きくゆらぐのを眺めた。そこは昨日まで嬉々と鹿の遊びたわむれていたのでひきかえて、静閑としづまりかえつていた。

「鹿どもは可愛い。だがこれを見る人間の

心は色々だ。わしやお前達のようにみ佛におつかえしている者丈けならばよいが、時には他所から此地に入つて来るものの中には、どんな悪心を抱く者もあるか知れぬ。獵師も来ないとはいえない。こんなに人によく馴れていたのでは、直ぐに捕まつたり、射られたりしてしまふ。さすれば、折角、わしらが可愛がつてやつたことが、反つて鹿の命を縮めることにもなる。鹿は本來山に棲むべきものである。それが人里に出て来るのが間違いだ。それに情をかけるわし等もまた誤つてゐる。鹿は山に歸るべし。いや歸すべしぢや。それが眞の慈悲というものだ。そう思いついたから、わしは昨日も、そして今日も、鹿どもを追つたのだ。明日もまた来れば追う。来なくなるまで叱つて追いかえすつもりぢや。」はるかに山の方で、呼び合う鹿の聲がする。上人はいい終ると、その聲をなつかしむように、默然として、耳を傾けてきいた。

佛心は大慈悲心是也。愛することは易い。

男が女を愛する。守銭奴が財寶を愛する。政治家が名聲を愛する。すべて愛である。だがこれ等の愛は、佛の愛ではない。人の愛である。愛とはそも、すべて、愛する對象を自分のものにする。自分の方に引き寄せることに外ならない。そのような愛は、詮じつめれば、結局、欲につらなる、「愛欲」である。

同じ愛ではありながら愛欲の愛は、いつまでも自我を脱けきれないのです。例えば政治的に、それ〴〵定められた議長とか、委員

だとか、理事だとかの地位がある。其等は、

社會民衆が、お互にうまく運営し協同生活を

するために作られたものでしかない。所が、

それ〴〵の地位につくと、はじめは地位の責

任を果たすことを第一として職務を愛して努力

するが、それが、一般大衆のための地位であ

る事を忘れて、地位それだけに執着して行く

ことから、不正、混亂が生ずる。つまり、大

衆への愛も、個々人の愛となると。これは愛

欲であり執着であつて、ぼんのうの流に押し

ながされていく。こういう事を釋尊は「十二

因縁」の中で、心の中に迷いがあつて、全體

のことを考えない愛は、結局、自縛自縛で苦しむのだと教えられてある。

世の中全體、眞の愛は、こういつた愛とは全く異なる。我々は愛欲を超える時こそ慈愛・大愛に決然として生きる時であり、さとりの道がつく。

上人の初めのように鹿を愛する事自體、甚だ美しい。何人も怪しまぬ慈愛のようである。我々はこの邊で、うつとりと自己満足に陥るのだ。

鹿は我々の周圍に澤山いる。鹿を見て谷を見ない場合もある。上人の「一喝」に、時々、驚いて、目を大きく見開くことだ。

浄土十一月號

十月號は大へん遅れて申譯けありません。十一月號は左の通り連載の外充實した内容で、本月末頃お届け致します。

○大佛開眼(藤田寛海) ○勤勞の苦痛を分ちあいませう(小笠原秀實) ○善心と惡心(山田鏡瑞) ○現代文學と佛敎(折原教詮) ○世界平和は(佐藤賢順)



小説

吉

水

(四)

東山未知夫

春の嵐

保延七年、勢至丸は九歳の春を迎えた。世間の人々の心は依然として落着きを失つてゐる。南都、北嶺の僧徒達の横暴はまだつづいてゐる。はては筑紫の僧徒・神人までが騒ぎだしたとの報も昨年あたり傳わつて來てゐた。

このような世情の中にあつて、時國の館には、今年も又櫻が花をつけていた。落着かない天下の人心にひきかえて、自然はかわることなく櫻の枝に美しい花を開かせてゐる。

勢至丸は今日も又、西に没する夕日の中に佛像を拜んでゐる。その可愛い肩に、一ひら一ひらと櫻の花びらがふりかゝる。繪のような自然のままの、美しい一ときである。

自然の描き出す世界は、そのまゝ美しい繪であり詩である。しかるに、人間の描き出す世界は余りにも醜惡である。

「自然のまゝに、自然のまゝに」

このような自然にひたりきつた営みの中に、「美しいもの」への通路が見出されそうに思はれる。それなのに、人間は「自然のまゝに」あることが出来ないで、その美しい自然を、自己のはからいで、醜いものにゆがめてゐるのだ。

夕陽の中に、靜かに散る櫻一ひら二ひら……。この同じ時刻に時國の館から程遠からぬ、この稻岡の庄の預所、明石の源内武者定明の館では、この自然の美しさにひきかえて、人爲的な、さし迫つた重苦しい空氣につままれていた。

物々しい甲冑に身を固めた武士が館の内を右往左往してゐる。庭前には弓箭薙刀の類が處狭きまでに立てかけられてある。

邸の奥座には當主の定明が、これも既に具足をつけ、主だつた數名の家臣を輪座させて、軍議をこらしている。

「につくい時國め、このわしを何と心得てをる？ あれは自から、仁明天皇の流れを汲んでいと申して、常日頃からこのわしを輕視しをる。」

「お言葉ご尤もにをざります。かれ時國めは、近頃とんと増長慢になり申しましてござりまする。」

「いかにも。時國の所領からは、また貢米が戻いてをりませぬ。

あれは一體、わが主定明殿を何んと心得てをるのであらう。」

「一々數え立てれば際限がないことよ。して、彼奴時國は、一體何故に余に面謁に參らぬのであらう。今年の正月にも、まるつきりやつて來ぬ。あいつ全く不屈きな奴よ。」

「今更、彼奴の慢心を數え上げても始まらぬでござらう。」

「そうだ。吾々は彼奴を今夜、夜討にするとところまで、一決して事を運んで來たのだ。」

「して、時國めの館へは如何にして攻め入ればよからうぞ」

「何のことはない。彼奴の館は、近頃風雨に荒れたまゝで、まだ修理もしていない。土塀も崩れたまゝであつた。」

「こゝ、二三年來の不作で百姓どもが生活に苦しんでいる。このときに百姓から修理工費を取り立てたり、百姓に賦役を課することは

可哀そうだと時國が言つてゐるそうだ。」

「道理で、時國の館は荒れたまゝだよ。しかし、その時國の言いが氣に喰はぬ。」

「口でだけは、尤もらしいことを云う。間接には、余が百姓を誅斂しているような云い方だ。これがそもそも彼奴が慢心して、この余を輕視している一つの證據さ。」

「いやに仁慈者ぶりをつて。わが定明殿を非難しをる。」

「また／＼話が戻つたようぢや。して各々方、時國めの館は存知の通り、土塀は崩れ、満足な櫓とて何一つない。われ／＼は大手を振つて攻入るばかりじや。」

「たかが時國一人、何もわれ／＼が陣を整えて攻入る要もなからう。」

「彼奴の館の内で手強い奴は一體だれだ。」

「そんな者は誰もいない。時國が一番手強い位だよ。それに、後は女子供ばかり……。」

「時國など問題ではない。たゞ、あとが恐いのよ。」

「あとが恐いとは？」

「百姓どもの噂がだ。預所の定明ともあらう者が、たかが時國風情を對手に事を構へたということさ。この事が知れば余の名譽にきずがつくわい。」

「成る程、時國めは殿の相手としては、全く物の數ではない。」

「他聞をはばかりが、もう一つ恐いことがある。」

「こゝには、吾々以外には聞いてをりませぬ。お洩しあれ。そのもう一つのこととは？」

「時國めには、此の美作の國に、親類が多いのだ。今夜、無事時國を仕とめても、後日、これらの親類が黙つてはいまい。」

「時國の親類。各々方、その親類の噂をお聞きか。」

「時氏という舎弟が近くにいと聞いているが。」

「わしは、時國の従兄弟に齋藤兵衛尉時定がいと聞いてをる。」

「わしは、奈良本の金吾が時國の舎弟だと聞いたことがある。」

「なにつ、金吾が舎弟だと。大變な者が親類にいるのう。金吾は恐れば火のような男だ。すぐにでも報復に跳んで来る。」

「だから、今夜の討入には、こちらの名を知られたくないのだ。」

「各々方、今夜の出逢いには、決して名を名乗られるな。」

「承知致した。郎従どもにも、さよう傳えましよう。」

「味方に討死するものが出れば、その屍は必ず持ち去るよう、郎従に準備させておかれよ。」

「目指すは時國一人だ。時國をさえ討てば、一同引返すことに致そう。もし追つて来るものがあれば、片つ端から討取るまでだ。」

「それは、至極簡単なこと。朝飯前、いやさ夜食前でござるて。」

「それ故、時國の館へ火をかけるようなことは要らぬこと。その

ような大げさなことは無用ぢや。又、火の手を見て近くの親類どもが馳けつけると事が面倒になるからのう。」

「今夜は、なるべく隱便に、かまえて秘密のうちに事を運び申そう。時國一人が目的だから。」

「さらば、各々方、あたりも愈々暗くなつて來たようだ、そろそろ出陣と致そう。」

陽はとつぷりと暮れている。春の宵は、自然のまゝに靜かに、隱やかに過ぎて行く。

明石の館から、時國の枋社の館への道を、一團の隊伍が密かに動いて行く。春の宵の靜かさに比べて、この一團には殺氣を含んだ不氣味な靜かさがまとつている。故意に息を殺したような冷たい靜けさ、その靜けさを、時々金物の擦れ合う音が重苦しく破つている。

刻一刻、時の歩みと共に、この一團も少しづつ動いている。目指すは一路、時國の館へ……。

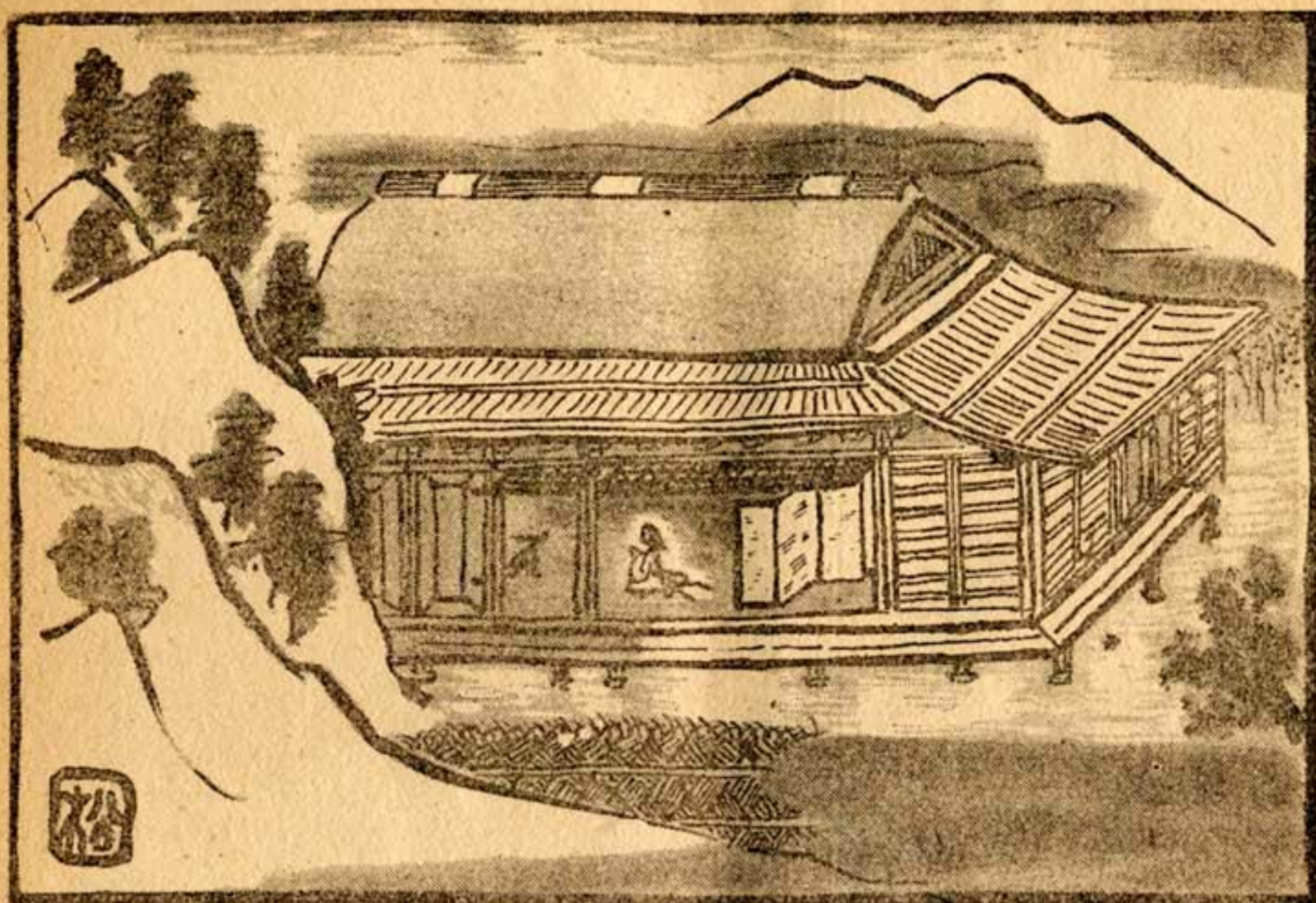
今宵、時國の館では、つましい夕餉の後、親子水入らずの團樂がつづいていた。

「勢至丸や、夕方何をしておぢやつた。」

「夕日が西の築山に沈むころ、佛様を拜んでをりました。」

「この子は、お父様のあとをついで、この館を守る意志はないの

か、武藝の方には余り心を用いないように思います。」



「ま、いいよ。わしもこの子には、是非とも私の跡をつがせたいとは思っていない。むしろ武力によるよりも、反つて心によつて人々を導くような人にさせたいと思つている。一應、この館の人々を率いる器量を作るため、武藝を教えるに過ぎないのぢや。」

「お父様、今日の夕日は何故か特別に美しくございました。櫻の花びらがひらひらと散つて、丁度佛様の後光の中に花が散つているようで、それはくきれいでした。自然の力の中には大きなく恵みがあつて、その恵みの力が人々の心を美しくしようとしているようでございます。」

「ま、この子つたら、大人のような口をききますこと。おほ……」
 「それは、いゝことに氣がついた。お前が大きくなつたら、人間の誰れにも與えて下さるこの自然の大きな恵みを、もつと深く研究しておくれ。してこの前、お前に渡した竹弓の稽古はしているかな。」
 「えゝ、あれからずつと折を見ては獨りで練習してをります。」
 「では明日にでも一度、お手並を拜見しようかの。」

親子の樂しき語らいは、いつ盡きるともなく續いていたが、夜もふけて行くにつれて、いつしか館の中は静かになつていた。もう郎從達も寝て了つたらしい。静寂！死の静けさ！館の内はしんとして物言一つ聞こえない。たゞ暗夜に散る櫻の花びらが一ひら二ひら……。刻一刻と時は移る。突如！一人の郎從の聲に夜の静寂は破られた。

「ややつ！ 曲者！」

(つゞく)

佛 教 入 門

(三)

竹 中 信 常

五 信 ず る こ こ ろ

前號で、阿彌陀様が西方極樂淨土の門口に

お立ちになつて、私共の行くのを、手まねきしてお待ちになつてゐることをいつた。

佛様が、必らず救つてやるぞと約束して下さつた、その合言葉が念佛なのである。

先に述べたとおり、「俺が」「我が」の心のある間は、南無——たよりすぎる、という、己れを空しくした心にはなり切れぬ。何ものをもふりすてて、それを空しくする所。

手折らるる人に香るや梅の花 加賀千代

そこに佛の世界、理想の生活があらわれて来るのである。己れを空しくするということは、たゞ頭をさげて人のいうことばかりきくことではない。欲をすて、怒りをすて、憎しみをすて、誇りをすてることである。逆にいうならば、何もいわずに、佛にたより、佛にすがることである。自分というものを棄ててしまえば、よりどころとするものは佛しかない。佛の建てた本願の力にすがり、その約束がはたされて、往生淨土の日の来るのが待たれるのみである。

而も、その佛は既に本願を成就して、現に西方極樂世界で、吾々が念佛往生するのをお待ちになつてゐるのである。念佛さえ稱えれ

ば、吾々は既に救われているのである。

しかし私共はこの苦しく、わずらわしい世の中に生きて、その日その日をめまぐるしく生活してゐるので、仲々に、思うようにはお佛壇に手を合せるひまも、寺にお参りして先祖の墓に詣でる餘裕もみつけにくく、ついつい、パンに追われて、佛をおろそかにし、亡き人々を忘れ去る。

だがそれでは絶対に救われない。阿彌陀様の淨土にお参りするには、何としてもお念佛を唱えなければならぬ。念佛を唱えるといつても、ただ口先だけでいうのでは、歌をうたうのと何の異りもない。

信ずること、佛の本願の力を信じて、これにたよりすぎる心、この心がなければいくら形丈け立派なお念佛やお經をとこなえても、まははお墓参りをしても、何にもならない。

信ずるということは、自己を空にして他にたよることである。電車にのれば、運轉手を信じてその腕前にたより、自分はたゞ黙つて乗つていればよい。都電の運轉臺の上に、「運轉手に話しかけることを禁ず」と札がはつてあるが、乗つた以上、信じてとやかく云わない。

俳人一茶も歌っている。

追風にうしろ任せて阿彌陀笠

おのづと西に吹かれゆくなり

佛を信じて念佛するのだつたら、理窟ぬきで信じたよらねばならぬ。眞宗の開祖親鸞上人もこういつておいでになる。

「親鸞においては、たゞ念佛して彌陀に助けられ参らすべしと善き人（法然上人のこと）の仰せを蒙りて信するより外に別の子細なきなり。念佛はまことに淨土に生まるる因にてや侍るらん。また地獄に墮すべき業にてや侍るらん。總じて以て存ぜざるなり」（歎異抄）

師の法然上人の教えに従つて、たゞ南無阿彌陀佛と唱えるのみ。よし、そのために地獄に墮ちようと、極樂に行けようと、そんなことはどうでもよい。信じて唱えるだけである。何という信心の深さであらう。信ずるからにはこうでなければならぬ。

「佛法の海に入るには信を以つて能入となす」と心地觀經に書いてある。まことに、信ずる心がなければ、いくら佛様が一生懸命に手まねぎして下さつても、馬の耳に念佛、蛙の顔に水である。よく、「縁なき衆生は度しが

たし」といわれるが、全く、信ずる心を持たぬ人にむかつて、百萬遍説教しても無駄である。そのような人は、佛を信ずることが出来ぬくらいだから、いわんや生きている他人を信ずることも出来ず、ついには、自分自身も信ずることがかなわずに、一生をフラフラと無定見にすごしてしまわねばならない。人を疑い、自分を疑う人に、何が出来ようか。出来るのは、自分で自分の首をしめて死ぬぐらゐである。

信ずること。數千年の傳統を持ち、幾千億の人々が信じて來た佛の教えを信ずること。これほどに確實で、たのもしいものが他にあらうか。支那の諺に「斷じて行えば鬼神もこれを避く」とある。信心は鐵よりもかたく、火よりも熱い。この信心を抱いて行くなれば、悲しいことも、苦しいことも、迷いなく、ためらいなく、平々坦々とした大道を滑るが如くに行くことが出来る。

こちらから、「おまかせ致します」と身も心も投げ出すならば、獵師ですら、窮鳥は殺ろさぬ。いわんや大慈大悲の阿彌陀如來にしてみれば、臨終いまわのきわに「助けたまえ」

と信じて唱える、一聲の念佛の聲に應じて、その人の枕頭に來迎しますのである。死の時、人には、理窟もなければ欲もない、名譽もなければ地位もない、等しく人間本然の姿に歸る。その偽らぬ最後の息で、「南無阿彌陀佛」と唱える。その信仰の心、信ずるところこそ、何にもまして私共の求むべきものなのである。

さあ、明日といわず、今日、ただ今から、佛は必らず救いたまうと信じて、念佛しようではないか。

六 佛を思う

釋尊が八十年の生涯を終り、沙羅双樹の下に横わり、正に涅槃に入らんとされた時、弟子の阿難は悲しげに問うた。

「御師よ、あなたが亡くなられるとは、一體どうしたわけですか」

「阿難よ、佛であるわたしといえども、生きてゐる以上は必らず死なねばならぬのだ」「それなら、私共は今後何を目當てにして行つたらよいのでしょうか」

「わたしのない後、お前達は私の説いた教

えを目當てとし、そしてまた、自分自身をよりどころとして生きて行きなさい」

釋尊はこのように教えられて、此世を去つた。だが弟子達の悲しみは深く、生けとし生けるものすべては、なげき悲しんだ。成程、釋尊は教えと自分とをよりどころにして行けといわれた。それにしても、親を失つて悲しむ子等に、どうしてそれで満足出來よう。思ふなといわれても、人々はありし日の佛の姿を想い浮べ、惱み悶えるとき、迷い疲れた時嬉しいにつけ、悲しいにつけ、今はなき溫顔を心に思い、その姿を念ぜざるを得なかつた。一心に佛の姿を念じ、無心に佛の名を呼ぶ時何となく心の痛み、胸の苦しさがうすらぐ心持がするのだつた。乳房を離れた幼な兒がふと目をさまして、母を呼び、母の姿を追い求めるように、佛の名を唱え、佛の尊容を描く時、人は思ひなしか、佛がまざまざと現われその兩手に優しく抱きしめたまうが如くに感じられた。

後世、私共が機會あるごとに念佛を唱えるのも、全くそのためである。人は何か據り所を持たねば生きて行くことは出來ない。商人

はおのれの商賣を、實業家は自分の事業を、學者は學問を、自分の生活のもととし、その中に自分の生命を捧げて行く。その際人々それぞれ信念を以つて事にあたる。自分の商才を信じ、自分の能力にたより、自分の學力をよりどころとしている。だが、そのような自分だけの力、自分が持つてゐる力能、それだけでは人は決して安心が出來ない。いかに商才にたけていても、國家的な變動のために百萬の賊も一朝にして消え失せてしまふ。自分の力だけでは、自分一個の生命を保つてゆくことすら出來ない。

人はおのれ一人で生きるものではない。自分を信ずる以上に他人を信じなければならぬ。然し、他人を信ずることが出来るだろうか。昨日の友は今日の敵。さつきまで利害を共にしていた商賣仲間も、一たび儲け仕事となると仲たがいをし、お互いにだまし合ひをする。人を信ずることは仲々むづかしい。浮雲の刻々にその姿を変えて行くが如くに、人の心は刹那のうちに變つてしまふ。そんなたよりないものを信じて、どうして安心して生きて行くことが出來よう。信ずるといふこと

はまかせることだ。一度これと見込んだら、自分の一身を投げ出してしまわなければならぬ。そのようなたのもしい相手は、人間同士の中に探しても容易にみつかるものではない。佛こそ、すべてを棄てて眞裸體にとび込んでゆく私共を、その廣大無邊のお胸に抱きとめて下さるのである。佛を信ずることは、すべてを佛にささげること。身も心もおまかせして、たゞ「南無阿彌陀佛」と唱えておすがりする外はない。

信ずれば、ラクダも針の穴を通つて天國に入ることが出來るとキリストは言つてゐる。佛も「信じてわが名を唱えれば、極重の惡人といえども救いとつて、淨土に生まれさせてやる」といつてゐる。まことにありがたく、慈悲深いことである。こうなればも早や理窟ではない。自然のうちに佛を想ひ、佛を念ぜざるを得ぬ。朝起きれば「南無阿彌陀佛」御飯を頂く時にもまづ「南無阿彌陀佛」一日の疲れた體を休めて床に入る時も思はず出る「南無阿彌陀佛」。佛を思い、佛を念ずる人々の顔が、どうして曇つたり、怒りに堪えたりするだらう。佛はそのままその人の心に移り住みたまひ、念佛する人の顔は溫顔あふるる如くに、ひかり輝くであらう。(つづく)

芝園だより

◎ 先日、本誌の方針について、

諸先生に集つて頂いて色々協議した。その結果が本月號邊りからポツポツ現れて來ました。何卒御期待の上、益々御愛顧下さい。

◎ それにしても、先立つものは何とやら。その便法としてトラクト、シリーズを大いに活用致したく、これまた大いに御協力下さい。

◎ 銀座の教文館。堂々たるビル

の二階を占めているキリスト教書店。その大半はキリスト教書物。本の數丈けみて歸つても、キリスト教通になり相なくらいある。現代人、特に時間的餘裕の少い都會人にとつては、何といつても文書傳道が一番。連れて行つた小學四年生の愚娘までが、美しい傳道カードを欲しがるに至つては、尻尾を巻いて退散の止むなし。

◎ 本月は宗教大會が開かれる。一宗の學問の粹を集めての結果は

獨り教學のためのみならず、東西意志の疎通にも一益あることを期待する。

◎ 中山文化研究所の雲藤氏、無理なお願ひに拘らず隨想を寄せらる。研究所の教界に占める位置は大きく且つ重い。それを切り盛つておられる氏の責務も又重い。

◎ お隣りの世界佛教の十月號に兩佐藤揃つての出陣。餘裕しやくしやくというところ。御活躍を期待する。(竹中)

○「子を持つて知る親の恩」と言うことがあるが、今度この誌の編輯に加はることになった。きつと親の有難さを知らされることだろう。せめて「樹靜かならんと欲するも風止まず。子養はんと欲するも親またず」と言ふ如き哀れなことの無い様、駄馬に鞭打ちたい。それにしても人の缺點は兎角目につき易く、自分のことは仲々に氣付かない。「親ばか」にならぬよう、皆様の大聲叱咤をお願い申し上げる。○うだる様な暑さながら、國の内

外には冷汗三汁の思いをすることが多い。然し「十二才だ」等と言はれて、たゞ御無理御尤とへいへいして居らずに、あの二河白道の様、水火をものともせず一筋に信ずる道に進みたいもの。淨土誌友は、皆筋金の通つた強い集團であると信じているが、果して讀者がこの誌に何を望み、更に要求されるか、私の知りたい最初で最大のことに。

○それにしても「先生、先生」と言つて居た方々や、机を並べて居た龍海坊と同じ仕事をするとはよく／＼のこと。故藤田寛雅氏とも淺からぬ因縁。遷化半月程前、某所に二人で大いに飲んで騒いだのが、最後の悲哀つきぬ思い出となつたのは、知る人のみの知る感概。先輩達に負けず、ぼち／＼仕事にかゝることにしよう。(安居)

◎編輯陣に安居香山氏が加つた。今までも間接的に種々援助されたが、今回から直接に有力なスタッフの一員として活動を開始。大橋

齋藤等諸氏と共にフレッシュな空氣が誌上にやがて溢れよう。

◎ 本月、吉水の挿畫は、新制作派の新人、松濤達文氏。氏は、正大出身、独自の畫道を開拓し、朝日新聞等畫評にも注目されて來てゐる。松濤誠廉先生の甥。僧侶にして畫をよくするもの少い中、將來が大に期待される。(龍海)

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(正共)。毎號定價三十圓(正四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」 十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿七年九月廿五日印刷
昭和廿七年十月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

東京都千代田區神田保町三ノ十
電話 芝(四三)一三二八

新刊

浄土トラクト

B六、十六頁
價十圓送八圓

浄土編集部編

信徒必携

信徒としてぜひ之だけは知つておきたい「浄土」の
みおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・
其他・佛壇・香・珠数・木魚・おけさ・佛式作法一通
りを丁寧に説明したもの、迫るお盆施本に是非

藤井實應著

牧起請文

宗祖信仰の本質も、新しい思想と深い體驗によつて、
かんでくたいて説かれた念佛信仰者必見の書

浄土シリーズ

文庫版四頁二圓
百以上六圓三百以上一、五圓
送、五十部毎八圓

大野法道著

五重の話

藤田寛雅著

お十夜

竹中信常著

お彼岸

前田龍海著

參詣手帖

賣切

法然上人鑽仰會

本會代理
責任取次

F. F. D. 幻燈機

..... スライド映寫機 (幻燈機)

◎ミナシキ58型B ¥12,880. 送料 ¥500. ◎マスターS50. B型 ¥11,880. 送料 ¥500.

..... スライド (フィルム)

- | | |
|--|---------|
| ◎玉虫の厨子物語—法隆寺にまつはる愛と藝術の悲しい物語 | ¥ 460 |
| ◎早耳のうさ吉—早耳で得意のうさ吉が早耳の爲大失敗 | ¥ 430 |
| ◎おしやかさまシリーズ—全五巻、釋迦の降誕から一生描く | 各 ¥ 430 |
| ◎白像の村—戦火に追はれ砂漠をさまよう人々を救う白像 | ¥ 460 |
| ◎二宮尊徳—貧しき農民のため困苦とたたかう尊徳先生 | ¥ 460 |
| ◎アルプスの娘—ヨハンナスベリ作、汚れしらぬ娘ハイジのも
のがたり二巻 | 各 ¥ 430 |
| ◎ビルマの豎琴(前、後)—文部大臣賞を得たビルマの豎琴のスライド化 | 各 ¥ 430 |
| ◎母を尋ねて—母を尋ねて三千里、海越へ山越へ少年マルコの話 | ¥ 430 |
| ◎幸福の王子—寶石と金で作られた幸福の王子が人々を助ける | ¥ 460 |
| ◎白雪姫—美しい白雪姫のさまざまな苦勞が幸せになる | ¥ 430 |

其他—作品300種、在庫豊富、目錄進呈致します。